
弟子と師匠と永い旅路

俊足の犬好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弟子と師匠と永い旅路

【Nコード】

N8859U

【作者名】

俊足の犬好き

【あらすじ】

地球で暮らす、ごく普通の男子高校生だった日比谷与一は、ある日、暮らしていた街を突然襲った、巨大な謎の化け物に殺されて、気がつけば剣も魔法もあるが命の危険も多いハードなファンタジー世界で、エルフの女として転生していた、現代の日本ではまず有り得ない、命を失うような危機を幾度も経験しながらも十数年間、運よく生き延びてきた彼女は、その日、突然街を襲撃してきた魔獣に負わされた傷で死にかけていた。しかし、それは彼女と師匠、そして愉快的仲間達の永い旅の始まりに過ぎなかった。 注意、この

お話は、T S（性転換）、ループ物、登場人物などの死、展開次第では軽いB L、G Lなどと言った要素を含みます、これらの要素が苦手な方はご注意ください。

第0話（前書き）

私はこれが人生で始めて書く小説です、まだまだ至らない所ばかりですが、皆様の小説に関する感想を出来る限り取り入れて行き、よりよい物にして行きたいと思っています。皆様のこの小説に対する正直な感想をお待ちしております。

第0話

「グ……ガア……」

弱弱しい断末魔を上げ息絶えた黒色の体毛に体を覆われた、後ろ足で立ち上がれば、平均的な身長の大人に匹敵する程の、一見狼のような生き物、ブラッドウルフと呼ばれる魔獣の一種である。

「……完全に孤立してしまったか、セリア、怪我の具合はどうだ？」

その両手で構えた大剣を一振りし、刀身にべったりと付いた魔獣の血を軽く落とした後、周囲を警戒しつつも、人間よりも一回り大きなシルエットを持ち、赤銅色の肌をした筋骨隆々の大男、オーガ族のガルガドがこちらを気遣う声をかけてきた。

「あー、……わりい、歩くのも無理っぽい」

痛みに顔をしかめながらそうガルガドに返答しつつ、俺は自分の右脚、今ではもう違和感も感じなくなるほどに見慣れたその細くも引き締まった白い太腿から、だらだらと、絶え間なく血を流す傷口に目を向けた。痛みはまだ感じるが、先程から徐々に右脚の感覚が薄れてきているのだ。こんなところで死にたいなどとは毛の先ほど

にも思いはしないが、血を流しすぎた上に自分の置かれている絶望的な状況に、思わず、重い溜め息を吐いてしまった。

「弱気になるなんてあんたらしくないわよ、あんたは何時も道理、強気に笑ってなさい。さっさと街の外に抜け出して他の生き残りとか合流しましょ、それに、大手のギルドのメンバーや騎士団はまだ戦っているはずよ、治癒魔術師や神殿騎士に会うことができればこの傷でも、きつと何とかなるわ。」

などと言ってくるのは、先ほどから俺の傷に止血などの応急処置を施している、頭と腰から猫のような耳と尻尾を生やした、獣人族の一種であるワーキャットの女、レティだ。しかし、明るい発言とは裏腹にその顔は青ざめ、不安そうに歪んでいた、頭の中では、もはやこの傷と出血量では今からどんなに早く味方と合流してもまず助からないだろう、ということがわかっていなのだ、しかしそれでも彼女は、最後まで決してあきらめる気はないようだった。

「ああ、そうだな、止血をしたらすぐに移動しよう、セリア、悪いがもう少し耐えてくれ」

そして、それは少し離れた場所に立ち、敵襲を警戒しているガルガドも同様のようだった。傷口からいまだに流れるこの血の匂いのせいで魔獣どもがいつ集まってくるかも分からないのに、たとえば、危険な状況でも仲間は絶対に見捨てはしないという二人の態度に、身体は冷えているはずなのだが胸の辺りが、ぽかぽかと暖かくなり俺はただ一言こう返すことしか出来なかった。

「……ありがとう」

普段はあまり見せない素直な態度に、二人の視線がこちらに集中するのを感じて、どうにも気恥ずかしくなり壁に背を預けたまま空を仰ぎ見た、美しい青空を侵食するかのようにあちらこちらから立ち上っている黒煙と、昼間だというのに空に浮かぶ大きな二つの星が視界に入り、どれほど遠くにあるのか見当もつかないかつての故郷を想い、しみじみと思うた。

ああ、随分と遠くに来たもんだ、と。

序章

弟子と師匠と永い旅の始まり

第0話「激動の過去と全ての始まり」

2011年7月28日、交通機関を使えば少々時間がかかるもの

の、日帰りで遊んで帰れるくらいには東京から離れ、都市部はだいぶ発展をしているが、周りに目を向ければ緑豊かな山と住宅街が見受けられるとある街、まだ高校が夏休みに入っただばかりの、茹だるような暑さが猛威を振るう、その日、日比谷与一^{ひびやよいち}、つまり、俺は、友人と三人で、都市部に遊びに来ていた。

「あー、今日も……あつい……」

先ほど暑さを逃れるために避難してきた喫茶店の席に座った瞬間、ぐでっと全身の力を抜くようにテーブルに突っ伏した、目に掛かるぐらいの髪を金髪に染め、外国人が見れば実に微妙な顔するであろう英語がでかかとプリントされた半袖のシャツとカーゴパンツっぽい半ズボンを着た、なかなか整った顔の男、青谷宗吾^{あおやそうご}が、窓の外に映る空を見て、実に忌々しげにそう呟いた。

「だよね、暑いのは毎年の事だけど、今年の暑さはありえないよね」

注文をとりに来た店員に三人分の飲み物と自分の分だけパフェを注文した、可愛らしい飾りの付いたピンク色のワンピースを着て、背中に軽やかかるぐらいの黒髪を短めのポニーテールにした、綺麗というより可愛いといえる少女、守矢麻奈美^{もりやまなみ}が宗吾の呟きにそう同意を返した。

この二人と俺を含めた三人は家が近所同士で幼稚園に入る前から、一緒に遊んでいた所謂幼馴染で、高校に入った今でも、いつも三人で遊び、子供の頃からのあだ名で呼び合う親友だった、宗吾はそー

君、真奈美はまーちゃんそして、俺は、いー君と二人に呼ばれている。

「いくら異常気象だとか地球温暖化だ、なんて言っても気温42℃はねーよ、外歩くだけで死ぬっつーの、その上、他の県はさらに暑いところあんだろ？ テレビじゃ毎日この異常気象のニュースでもちきりだぜ」

俺は今朝見たテレビの内容を思い出しながら先程の二人の言葉に同意した。昨年の12月ごろからだろうか日本どころか、世界中が異常気象に見舞われているのだ、毎日のようにニュースでは日本のどこの地域が観測史上最高気温を更新したとか、とある国では気温が下がり続けて凍死者が続出しているとか、三週間も雨が降り続いて大規模な洪水が発生した、なんて話が流され続けているのだ。

「まじでやばいよな、これ、本当に地球終わったりなんかしないよな？ こんな若さで死にたくねえー！」

「少し前から、この異常気象は神の怒りだ、世界の終末が近づいているんだ！　なんて感じのことを叫んで世界中で怪しい新興宗教が乱立してるらしいし、近頃世界中で、神隠しみたいに人が消える行方不明者とか変死体なんかが出ている話もネットじゃ騒がれてたよ。あと、いまだに、この異常気象の原因わかってないんだって、生放送の番組で天気予報士の人が頭抱えて「これは夢か！？　何でこの気象条件でこんな動きをするんだ、ありえない！」なんて錯乱してスタッフに止められるのを見たし、もしかしたらまだ気温が上がる

のかも、……地球が終わる前に、この異常気象で人間が先に終わるような気がするよう。」

「「……うへえー」」

宗吾の魂の叫びに返した、まーちゃんのその言葉に、思わず隣に座っているそー君と俺は同時にうめき声を上げた。これ以上気温が上がったりしたら本気で外を歩いただけで死んでしまいそうだ。その上、他の話題もすでに超低空飛行をしていたテンションを地面に叩き落すには十分だった。

確かに新興宗教は街中で露骨に勧誘のための演説をしているし、行方不明者や変死体の話は、普段ではほとんど国内のことしか放送しないニュース番組でも最近では取り上げられていた。実際にそういうおかしい事件が起きているのだ、一体何が起きているのか、俺たちだけではなく、世界中の人間が心に不安を抱いていた。

その後、建物を転々と移動して暑さを避けながら遊び、午後5時ごろ二人と家の近くで別れた。何の変哲も無い普通の二階建ての家、その玄関のドアを開き家の中に入ると、すでに家族全員の靴があった。

「ただいまー」

「おかえり、外暑かったでしょ、水分取ったときなさいよー」

帰宅の声を上げつつリビングに入った俺に返事をしたのは姉の美咲^{さき}だった。俺よりひとつ年上の高校3年生でせっかくの夏休みだというのに、最近の暑さのせいで、あまり外に出たくないようで、最近は数年前から伸ばしている長い黒髪を髪留めで纏めて後頭部に上げて、ソファアーにだらしなくうつ伏せに寝そべったまま、アイスクリームを食べている姿をよく見かける。

「美咲、またアイス食べているの？ 太るわよ。あ、おかえりなさい、与一」

数日前に体重計を親の敵のように睨んでいたのを思い出したのだろう、そう言いながらキッチンから出てきたのはショートの黒髪に年齢のわりに若く見える童顔の母、愛子^{あいこ}だ。昔は童顔のせいで子供っぽく見られるのが嫌だったと言っていたが、最近は若く見えてお得だと思っているらしい。ちなみに、姉のその不毛な行為は実に20分もの間続き家族全員がその姿を目撃していた、まーちゃんも気にしていたが、俺もそー君もむしろ二人は細いと思っていたのだが、女性のこの手の悩みは男には理解しにくいものなのだろう。

「おお、帰ってきていたのか、お帰り、与一」

「にーちゃん！」

姉ちゃんが母さんの一言に慄いている間に、二階から降りてきたのか、俺の後ろからリビングに入ってきた短髪で平凡な風貌に眼鏡をかけた、父、明久あきひさとその腕に抱かれた　まだ二歳になったばかりの妹、涼花すずかが声をかけてきた。ちなみに俺も姉も顔は母に似て童顔気味で二人とも、もし身長が低かったらいまだに中学生だと思われるような顔をしていた、微妙にコンプレックスに感じているのだが、男である俺にははたして母の様にこの童顔をお得に思える日が来るのだろうか。ちなみに、妹も幼いながらも母の面影が顔にあることからこの調子では父には似ないのだろう、自分の平凡な顔に似ず父として微妙に落ちこみながらも喜んでいたのが印象に残っている。

「二人とも、ただいま、今日は帰るのが早かったんだ、父さん。」

父さんはごく普通の会社員で、いつもは大体6時半から七時ごろに帰ってくるはずだが、今日はすでに帰宅し、家着に着替えていた。

「うん、近頃、倒れそうなくらい暑いだろう？ほとんどの社員が体力的にも精神的にも参っていてね、このまま放っておけばいつ倒れてもおかしくないから、とりあえず数日間は仕事を早めに切り上げて、残業も禁止で体を休ませておけて、通達があったんだ、倒れられるよりはましだと思ったんだろうね。」

どうやら、大人達もこの暑さには大分まいっていたようだ、営業時間を減らすなんてかなりの大事だろうにそれをやらざるを得ないぐらいに弱っているらしい。

その後は何時も道理、家族で食事を取り、風呂に入って歯磨きをした後、昼にまーちゃんと言っていた話をふと思い出して、二階の自分の部屋で少しPCを使って、幾つかのサイトでニュースを見た後、ベッドに横になった。

俺は布団の中でぼんやりとまどろみながら、先ほどPCで見たとある噂について考えていた。

行方不明者や変死体についての記事だ、人の見ている前で突然人が消えるなんていう、神隠しのような話と、主に老人や赤ん坊などに起きる、先程まで元気だったのに突然倒れ、体にはまるで異常はないのにまるで魂を抜かれたかのように死んでしまう、なんて話だった。

まるでオカルトのような話だが、これらがただの異常気象によって高まった不安につけ込んだ、誰かが流した都市伝説的な話で終わればいいのだが、なんとこれらの事件は、実際に目撃者や監視カメラの映像まで出ているのだ、ネットでは悪魔やら妖怪の仕業だとか、新種の細菌兵器や殺人ウイルスだ、なんて騒がれており、原因は分かっているようだ。

これらの事件が起こり始めたのは、異常気象が騒がれる少し前の去年の12月ぐらいからで、映像の加工が出来そうな神隠しはともかく、正直俺にはその二つがどう結びつくのか理解できないが、突

然人が死ぬのはこの有り得ない異常気象と何か関係があるのではないか、なんていう噂話もネットの掲示板では出ていた。

本当にこれから世界はどうなっていくんだろうか、などと、未来に不安を感じながら、俺は眠りに付いた。

意識が眠りに向かって、まどろむなか、なにか、形容しがたくも恐ろしい咆哮が、聞こえた気がした。

そして、一夜明けた次の日、2012年7月29日。

相変わらずの外を歩けばすぐ倒れてしまいそうな暑さのその日。愛すべき平凡な世界が終わり、俺の長い旅が、この日始まった。

昨夜寝る前に8時にセットしておいた目覚まし時計の耳障りな音

を、スイッチを叩いて止め、寝起きのぼんやりとした頭で枕元に置き充電していた携帯を開いた。メールはそー君とまーちゃんからそれぞれ一件きていた。メールの内容を読み、ベッドから起き上がりいまだ働かない頭で本日の第一声を呟いた。

「……あちー……」

その日の気温は、42.3℃だった。

いつも道理の朝を家で過ごし午後から俺は、俺とそーくんとまーちゃんの三人で都市部に遊びに来ていた。ゲーム好きのそー君が新しく出来た大型のゲームセンターの話を知り合いから聞き、俺もまーちゃんも暇だったら一緒に行かないかと誘われたのだ。朝に来ていたそー君からのメールの内容はこの事だった。

「そういや、まーちゃんが言っていた神隠しとかの話、俺も昨日の夜、少し調べてみたんだけど、監視カメラの映像とかまでアップロードされてたぜ」

「あ、俺もそれ見たぞ、人が突然消えるってやつだろ？」

目的のゲームセンターが入っている、駅の近くにある大きなショッピングモールに向かう途中、まるで俺達三人を焼き殺そうとして

くるようなアスファルトの照り返しと周りに立つビルの鏡のような窓から反射される光というこの気温では殺人的な連携技を全身に受け、汗をだらだらと滴らせながら、大通りのスクランブル交差点で信号待ちをしているとき、そー君が唐突にそんなことを言い始めた。どうやら、そー君も昨日のまーちゃんの話の思い出したのか興味を覚えて、例の事件を俺と同じく調べていたようだ。

「おー！ 二人もあれ見たんだ、すごいよね、あれって本物なのかな！？」

「いや、人がいきなり消えるなんてありえねえって」

例の神隠しの映像の真偽をまーちゃんは実に興奮気味に俺達に尋ねてきた、まーちゃんは小さな頃からオカルト好きで、本人曰く子供の頃に本物の魔法使いを見たと言い張っており、世界のどこかに本物が存在するのだと、いまだに信じているようだった。親友としては少し心配な趣味だが、人に言えばあまりいい目で見られないのは分かっているようで話をする相手は選んでいるらしく、呆れはしても付き合いを変えることは無いと確信した俺とそー君に言っただけで、他にこの話をしたのは自分の家族だけらしい。そんなまーちゃんには危ない会合や儀式とか邪神崇拝の宗教などの怪しい団体行動には全く興味なくて、普段は基本的に雑誌やPCで調べたり古本屋で胡散臭い本を探したりしている。

「まあ、今時のCG合成技術とかすごいし、この手の偽物なんてありふれてるしな」

「えー、あの映像の検証してる本職の人もいたし、本物だと思うんだけどなあ」

「でもよ、映像が本物なら行方不明の人が実際に居るってことだろ、なら偽物のほうがいいんじゃない？」

「はうっ」

最近の技術ならあんな映像は簡単に作れることを指摘したが、食い下がるまーちゃんに止めを刺したのはそー君が発した一言だった。

「お、青だ、さっさ建物入ってなんか飲もうぜ！」

そー君はもはやゲームで遊びたいというより、この暑さから早く逃れたい気持ちのほうが強いようで早足でスクランブル交差点を進んで行き、俺は横でそーくんに止めを刺されていまだにうなだれていた、まーちゃんの手を掴んで引きずるように歩き始めた。そー君が先を歩いて俺がマイペースなまーちゃんを少し強引に見える場所で必ず立ち止まって待っていてくれるそー君の所まで連れて行く、小さな頃からいつもこうでそれはまさしく、俺たちの日常と言えるものだった。

そして、横断歩道を半ばほど渡ったところで、それは唐突に始まった。

突然、みしり、というガラスにひびが入るような音が交差点に響いた、すぐ近くで鳴らないと気づかないような小さな音の筈なのに、なぜか大通り全体に聞こえるほどよく響き渡り、心を直接掻きまられる様な、不安を掻き立てられるその音はスクランブル交差点上に居た俺達だけではなく街を行き交う人々や、信号待ちをしていた車の中に居る人間までもが、いや、もしかしたらこの街にいるすべての人間が聞こえたのかもしれない。普通なら小さすぎて聞き逃してしまいそうぐらいの音だというのに、周りにいる俺を含めた人間皆が無意識の内に音の発生源を見つめていた、今考えるとそれは本能の警鐘だったのかもしれない。

音の発生源は、真直ぐに走る大通りから少々遠いが丁度正面に見える、都市部から三キロほど離れた場所にある、久遠山クオンヤマからだった。

みしり、みしり、と音が鳴り響く度に、久遠山の山頂付近に在る名前を知らない古い神社から、空に向けて放射状に罅の様なものが走ってゆくのが見えた、いったい何時からだろうか、気づけばまるで何かに恐れるように俺の足はがくがくと震えていた。隣に居たまーちゃんも、俺の周りの足を止めていた通行人も同じようその顔は青ざめて今にも倒れてしまいそうだった。

そして、大音響のガラスが割れるような音とともに、空が割れ、それは現れた。

空が割れた、そうとしか表現できないような奇妙な風景だった、ひび割れ穴が開いた空の向こう側はモノクロ写真のような灰色の空が覗いていた。そしてその穴の向こうから百か千か、数えるのも馬鹿らしい幾つもの色とりどりの光が飛び出してきた、空が割れるなどという出来事はそれだけでも世界中を駆け巡るような怪事件だろう、しかし、そんなことはどうでもよく思えるようなモノがそこには居た。

それを見ているだけで冷や汗がどっと噴き出してくると同時に吐き気がこみ上げた、全身に鳥肌が立ち、心臓を鷲？みにされたかのように息が詰まる。

それは一番近い形状を上げるなら鯨のように見え、まるで這うように割れた空から出て来ようとしていた。ゆったりとした動作に反して素早く、するするとその体がひび割れた空から吐き出されてゆく。体は真っ黒なドロドロとした何かで出来ており顔には口しか見取れない、その体の表面は常に不気味にうねり波打っていた。その身体は巨大でまだひび割れた空から半分も出て来ていないというのに、優に500メートルはある上にその巨体は海を泳ぐように空に浮いていた。そこまで見ていてようやく気がついた、ひび割れた空の向こう側から飛び出していた光はその鯨のような化け物に殺到していたのだ、光は体の表面にふれると爆発するかのように一際大きく輝いて消えてゆくのが見えた。

「いーくん、逃げるよ」

いまだに呆然としてその化け物から目が離せないでいると、突然隣に居たまーちゃんが俺の手をつかみ強引に走り出した。引きずられるように手を引っ張られ、交差点を渡りきったところで周りの人間と同じようにあの生き物から眼を離すことができないでいたそー君のところまでたどり着くと、俺の手を一旦離し、まーちゃんはそー君の両肩を思いっきり揺さぶりこう言った。

「そーくん、そーくん！！ 逃げるよ、ここに居るとよくない気がするのっ！」

いつになく焦ったまーちゃんの声に、そー君がはっと夢から覚めたような顔をしてこちらを向いた直後、俺たちと同じ様に正気に戻った何人かに混じって、俺たちはなりふり構わずにあの化け物とは反対方向に大通りを全速力で走り出した。

「なんだよあれっ、なんなんだよあれっ!？」

「しるかよっ、少なくとも、俺たちにとっていいものでは無さそうだけど、まーちゃんは何か知ってるのか!？」

「わかんない、けど、とにかくあれからは距離をとったほうがいいと思ったの！」

走りながらそー君が叫び俺がまーちゃんに尋ねた、どうやらまーちゃんも知らないようだが、まーちゃんの判断は間違っではないのと俺は感じた、あれは決して近づいてはならないものだ、まるで魂

が拒絶するかのように、自然とそう思えたのだ。

そして走りながら後ろを振り返れば、まさに、あの化け物がひび割れた空からその全身を出すところだった、そして、その巨体に見合った大きな口を開くと、到底言葉では表現できない様な聞いたただけで身体どころか魂の芯まで凍ってしまいそうな咆哮をあげた。

「――――！！」

この時になって、ようやく化け物を見ていた人々が正気に戻ったようで、街のあちこちで逃げようとする人々の悲鳴や他人を押しつける怒号が上がり、人々が逃げだし始めた、俺達は、人の波に揉まれながらも、足があまり速くないまーちゃんの両手をそれぞれ握って必死に引っ張って走った。

しかし、その必死の逃走も、あの化け物の前には意味など無かったのだ。

「まじかよ！？」

走りながら後ろを見た、そー君のその声に思わず俺もまーちゃんも化け物のほうを振り向いた。

「そんなっ！」

「こんなの、ありかよ…」

久遠山から一直線に大通りを、まるで氷を割って進む砕氷船のようにあの化け物は口を開けたまま真直ぐに地面を削りつつ、凄まじいスピードで進み車や砕かれ舞い上がった地面ごと逃げ惑う人々を飲み込みながらこちらに向かって進んで来ていたのだ。

気づいたときにはすでに遅く、俺たちに出来たのはいままさに自分たちを飲み込もうと大口を開けて迫る化け物の巨体を、呆然と見ていることだけだった。

気がつくと俺は真っ暗で何も見えない場所にいた、身体は動かないどころか、身体を動かす感覚すら感じられ無い上に、周りからは苦痛に喘ぐ声や助けを求める声が絶えず上がり続けており、聞いただけで恐怖を駆り立てられて正気を失いそうになってしまう大合唱が、まるで直接頭の中に響いてくる様に俺のいる場所に響き渡っていた。

「まーちゃんっ、そー君っ、聞こえたら返事をしてくれ!!」

意識を失う直前の光景から考えるに、ここは恐らくあの化け物の腹の中なのだろう、目の前すら見えない暗闇の中で、自分の身体を動かすことも感覚を感じられないことの理由も分からないが、このままではあまりの恐怖に正気を失いそうで、気づけば俺は何かに縋る様に、共に飲み込まれたはずの親友の二人の名前を大声で叫んでいた。しかし、二人の返事は返っては来ず、変わりに聞こえてくるのは先程から頭に響き続けている誰かの苦痛を上げる声の大合唱だった。

「ううっ、身体が…!?!」

不安と恐怖に押しつぶされそうになっていると唐突に、いまだに感覚の無い身体が強烈な痛みを発し始めた、感覚が無いためか身体のどこが痛みを発しているのかすら理解できなかったが、その痛みは段々と収まるどころかより強くなってきた。

「誰か助けてくれ、だれかああああ!!」

俺は、あまりの激痛に、まともに考えることすらも出来なくなつて、助けを求める絶叫を無意識の内に上げ続けていた。

そんな時だった、それがおきたのは。

何も見えない真っ暗な空間の上から、まるで宝石のような色とりどりの小さな光が雪のようにゆっくりと降り注いできたのだ。それは本当に不思議な光だった、この暗闇の中でもはつきりと見えるほど強く光っているはずなのに、周りの闇は決して晴れず、俺自身の身体もその光によって見えることは無く暗闇に包まれたままだった。そして降り注ぐその光のひとつが俺に触れた瞬間、今まで俺を苦しめていた激痛がほんの僅かにだが和らいだのだ。なぜ痛みが和らいだのか分かりはしなかったし僅かに和らいただけでいまだ俺の身体を激痛が苛み続けていたが、痛みが和らいだという事実だけを認識した俺は、咄嗟にこの痛みから逃げようと、次々と降り注ぐその光に向けて感覚の無い両手を伸ばした。

「頼む、こっちに来てくれ！」

心の底からの願いを籠めた声を上げながら伸ばそうとした両手は、相変わらず空間を満たす暗闇で自分にも見えなかったが、俺の近くに降り注いでいた光はまるで今発した声が聞こえたかの様に次々に此方に向かって来て俺の暗闇の中で輪郭さえ見えない体に入り込んで来る、そして俺の身体を苛んでいた痛みが薄れていくのが分かった。

「ああ、ありがとう、ありがとう……！」

気が付けば俺は、今まで感じていた体を手足の先から少しずつ引き千切られていく様な耐えがたい激痛から救ってくれたその光に、

心の底から感謝の言葉を呟いていた。

そして、今までの理解できない事象とさらに追い討ちをかけるような痛みから一旦開放されて、少し頭が冷静になり、何か光以外に変化はないかと周りを見渡そうとしたとき、一際大きな輝きがいつの間にか目の前にあるのが見えた。

「なっ!？」

それは今まで降り注いでいた小さな光と違い大人を丸々包めるような大きな光で、俺が驚いた瞬間にするりと他の小さな光と同じ様に俺の中に入り込んできた。すると光を浴び、なんとか耐えられる程度には弱まっていた痛みが完全になくなり、この暗闇で意識を取り戻してから一度も見えなかった自分の身体がはっきりと見えたのだ。

わけがわからなかったが何が起きたのかを疑問に思うよりも先に俺は、痛みが消えたことに対して心の底から安堵と喜びを感じて、先程と同じように俺の中に入り込んだ光に深く感謝した。

そして、もう一度、まーちゃんとそー君を探すために声を上げようとして周りに目を向けたとき、俺と同じように身体を持った人の姿が遠くにぼんやりと何人か見えた、この空間でようやく始めて見

つけた人の姿に俺はすぐさま声をかけようとして、次の瞬間凄まじい光が目を焼いた。

「ぐああっ、一体今度は何が起こるってんだよ!？」

完全な不意打ちで思いっきり光を見てしまったため、目がまともに見えなくなった。こんなわけの分からない状況で目が見えない、ということに感じた恐怖を誤魔化す様に今までの連続した、理解の出来ない理不尽な状況に対する怒りを叫んだとき、今度は身体を凄まじい力で引っ張られるのを感じた。

「うおおおおお!？」

その衝撃は例えるならば、昔、西部劇の映画で見た縄で足を縛られて全力で走る馬に引きずられる、というものに似ていたかもしれない、もっとも、身体に感じる速度はミサイルに括りつけられているような常軌を逸した速さだったが。右に左に所か上にも下にも突然方向転換しながら引っ張られ続けて行き、意識が朦朧としてきた頃、始まりと同じくまたもや唐突に引っ張られるのが止んだ。

先程までの不安しか感じない状態とは打って変わってそこは、そこにいてだけで心が落ち着いていく様な穏やかな場所で、先程光に焼かれた目はいまだに何も見えなくて、そこがどんな場所なのかは確認できなかったが、その穏やかな場所で身体に何か暖かいものが触れるのを感じた、俺はそれに対して何故かとても懐かしくて安

心するという不思議な感覚を覚えた。

しかし、ようやく訪れた平穏はすぐに崩れ去ってしまった。

「ぬおおおおお！？　もうやめてくれえええ、俺はもうここには
つといてくれていいからあああああ！！」

未だに何一つ自分の置かれている状況を理解することは出来無かったがようやく一息つけるかと思ったそのとき、またもや凄まじい力で何かに引っ張られ始めたのだ。先程のような恐ろしい目に遭うのを恐れた俺は、形振り構わずいまだ触れていた懐かしい感覚のする何かに爪を立てる様な勢いでしがみつき、居るのかも分からない俺を引っ張る存在にたいして許しを請いながら必死に抵抗をした、しかし、俺に抵抗できたのは僅か十数秒だった。

「あああ……あああ……」

あれからまた引っ張りまわされて、どれくらいたったのかも自分では分からなくなった頃、もはや悲鳴を上げる気力も無くなり振り回され続ける気持ち悪さと込み上げる吐き気にうめくことしか出来なくなったころ、引っ張る力を突然感じなくなった、そして今度はゆっくりとした流れ、例えば方としては微妙かもしれないがまるで流れるプールに浮き輪を浮かべて流されるような、先程までとは雲泥の差の優しい流れに変わったのだ。

そして、先程まで延々と続いた、何かに凄まじい速度を一切落とさずに鋭角な角度であらゆる方向に決り込む様に方向転換し、引っ張りまわされ続けるという拷問のような謎の現象に衰弱しきっていた俺は、その緩やかな流れに身を任せたまま意識を失った。

どれぐらい経っただろうか、時々意識が浮上するのは感じていたが周りを確認することができるといほどに回復しておらず、起きてはすぐにまた意識を失うという行動を繰り返し、再び完全に意識を取り戻したときには俺を取り巻く状況は、すっかり変化していた。

「ああ、生まれてきてくれてありがとう！ セレティア、あなたの名前はセレティアよ。」

「見ろ、目元がエレアそっくりだ、きつとお前に似て美しく育つぞ！」

などという会話を俺の頭上で交わしながら、愛おしさの籠もった優しい眼差しで俺を覗き込むように上から見つめる、先がとがったやけに長い耳を持つ金髪の美男美女がいた。

その光景を見た瞬間、あまりにも理解不能な状況の連続に疲れきった俺は、とうとう自分におきたことについて考えるのを止め、ただ、こう思うと共にもう一度意識を失った。

……もう、どうにでもしてくれ……

第0話（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございました。もしも、ここが間違っている、この表現の仕方はおかしい、などの感想があれば、書きこんでいただけると、とてもありがたいです。更新はあまり早くはありませんが、これからも皆様にこの作品と、のんびりとお付き合いいただける用にごんばって行きたいと思います。

第一話

木造の家の中、三人の女性が楽しそうに会話をしながら布を使つてなにやら作業をしている、それを横目に俺はゆりかごの中で板張りの天井を見上げていた。

そして、俺と同じように両隣に置かれているゆりかごから聞こえてくる赤ん坊の声を耳にしつつ、これまで何度もしてきた自分に起きた出来事についての整理をゆっくりと目を瞑つてもう一度始めることにした。まあ、ようするに、今他にやれることがないので最近よく行っている暇つぶしを始めただけだった。

あの理解できない恐怖体験を味わった後、やけに耳の長い男女を見て気を失った日から三ヶ月ほどたち、ようやく俺は現実逃避をやめて、一応はこの現実を受け止めることにした。

正直、こういう話の出てくる宗教とかには全然詳しくは無いし、普通に生活していて小説やゲームぐらいでしかこんな単語は聞いたことが無いが、どうやら俺は、いわゆる転生というものを体験したらしい。

自分の現状を一応ではあるが認識するのにかかった三ヶ月という期間を長いと取るか短いと取るかは人それぞれだろうが、気が付いた

ら自分の身体が赤ん坊になっている、なんて事態が何の前フリもなくある日突然自分の身に降りかかってきてその直後に冷静にその状況を受け入れて、これはきつと転生したんだ！　なんて考えられる人間は稀だろう。

そして一般人でごく普通の高校生だった俺は当然、とても混乱をした。

気を失ってから、どれ程の時間がたったのかは分からないが、意識を取り戻した俺は気を失う前に見た女性の胸に抱かれていた。

最初は状況を理解できなくて固まり、次に自分の身体に起きた異変、身体が赤ん坊になっていることに気づいて大いに混乱した後、最後に街に突然化け物が現れて友人共々食われるなんてありえない体験を思い出し、ああ、これは夢だな、と俺は結論付けた。

もちろん、その後何日経っても見慣れた自分の部屋で目が覚める、なんてことはなく夢などではなかったことを思い知ったわけだが、あんな荒唐無稽な事件とその後に味わった恐ろしい痛みや、まるで拷問のような苦しみが現実には起きたことだなんてすぐには認められなかったのだ。

そして一週間以上が経ち、いよいよこれが夢では無いと気が付き始めた頃になって、ようやく俺は自分の身に起きたことについて本格的に考え始めた。

といっても必死に頭をひねった結果分かった事は本の少しの事柄しか無く、それにすら何故そうなったのかなんて説明をしてくれる都

合の良い存在が居るわけも無く、全てがただの推測となってしまうのだが。

まず、俺はあの時、化け物に食われて死んだのだろう、ということだ、死んだ瞬間のことは分からないが、あんな巨大な化け物に街の大通りごと飲み込むような勢いで食われたのだ、到底自分が生きていられるとは思えなかった。

あの後、腹の中消化されたのか、後から飲み込まれてきた道路の破片にでも潰されたのかもしれない。

俺が化け物の腹の中だと思っていた真っ暗な空間で見た謎の光や、凄まじい力で引っ張りまわされたりしたのは、もしかすると死後の世界だったのかもしれない。

そして死んだ後に俺は転生をした、というのが俺の出した結論だった。

だがそうになると、一緒に飲み込まれたまーちゃんやそー君は生きている可能性は絶望的だろうと言う事、もし転生をしていたとしても俺と同じように前世の記憶を持ったままなのだろうか、仮にそうだととしてもどうやって見つけられるのか皆目見当も付かない。

あの後、化け物が現れた都市部から程近い住宅街に住む俺の家族がどうなったのかも気になる。

みんなの安否が気になるのなら、自分で調べられる位の年齢になるまで成長を待てばいい話なのだが、それを実行するのはとても大きな障害が立ちはだかっているのだ。

世界の壁というちっぽけな人間にとっては、どうしようもないほどの大きな障害が。

そう、俺が転生をしたのは、剣も魔法もあるファンタジーな異世界だったのだ。

「あらセリアちゃん、おっきしたのね、おはよう」

別に寝ていたわけではなくて、ただ目を瞑り集中してこの三ヶ月間の事を改めて整理していただけたのだが、そう言って植物の蔦で編まれたゆりかごの中に寝かされている俺に笑顔と共に声をかけてきたのは今生の母であるエレンシア・セラ・リエト、親しい人物にはエレアと呼ばれている美人さんのエルフだ。

……俺の目が突然おかしくなった訳ではなく、ファンタジー物の小説やゲームなんかでよく登場する、耳が長くて美しい容姿をしていて魔法や弓を使う長命な種族の、あのエルフだ。

「そういえばそろそろミルクの時間だったわね、うふふ、お腹がすいて起きちゃったのかしら？ はいセリアちゃん、ごはんですよ」

そう言って母さんは明るい緑色のエルフ特有の民族衣装っぽい服を少しずらし、胸をはだけて俺の身体をそこに近づけた。

転生しからずでに数え切れないほど経験した行為だがいまだに気恥ずかしさをほんの少しだが感じてしまう、……本当に気恥ずかしさだけだ。

きれいな女性にこんなことをされれば普通の男だったら興奮したりするだろう、しかし今の俺にはそういう対象として全く見られずに気恥ずかしさしか感じない、この体が彼女と血の繋がった子供だからなのだろうか。

昔、精神は肉体の影響を受けるとか言う話を何かで見た記憶があるしこの体自体以前の自分のものとは似ても似付かないのだ、少なくともその事と関係が全く無いということは無いだろうと俺は思っている。

しかし、精神が体の影響を受けると言うのなら、俺はこれからどうなっていくのだろうかと自分自身の将来に何ともいえない漠然とした不安を抱いてしまう、なぜなら。

俺の今生の名前はセレティア・リア・リエト。

将来に色々な意味で不安を感じているエルフの女の子だ。

……性転換の魔法とかないのだろうか。

弟子と師匠と永い旅

序章

第一話「新たな故郷と穏やかな日々」

「……んゝ、朝かぁ……」

木の扉が付いた簡素な窓から差し込む光を閉じた目蓋に感じて俺は布を何枚も重ねて敷いただけの布団から体を起こした、どうやら一緒に寝ていた両親はすでに起きているようだ。前世と比べると随分と鋭敏になった長い耳に、朝食を作っている母さんの立てる音が聞こえてきた。

「あゝ眠い……顔、洗ってこよう……」

前世より起きる時間が随分と早いのも原因の一つかもしれないが、どうにも朝は苦手で頭がうまく働いてくれない。

ぼうつとしながらも枕元においてある着替え、緑色の綺麗な刺繍が施された民族衣装のようなワンピースに手を伸ばして、のそのそと着替える、服に頭を通してから袖にも両手を通す、顔にかかった長い金髪を払いながら俺はとりあえず目を覚まそうと、家のすぐ外に置かれている生活用の水を溜めている樽に向かった。

俺が転生してから時間は過ぎ去って行き特に大きな事件も無く五歳になった。

恥ずかしい話だが転生した頃はよく死んだときの事を夢で見てパニックになり真夜中に大泣きをして家族には迷惑をかけていた。しか

し、二歳頃から大分心の整理もついてきて徐々に夢を見ることもなくなっていた。

悪夢こそ見なくなつたが正直に言うとは完全に吹っ切れてはいない。今でもふとした事で前世のことを思い出すのはよくあることだ。それに俺自身も前世のことを忘れてくれないと思つてゐる。

しかし、だからといって、姿も性別も変わってしまったとはいへ、原因は分からないものの転生をして今生きているのに、どうすることも出来ない過去に囚われ後ろ向きな事を考え続けて今を蔑ろにしたり、お腹を痛めて俺を生み、愛し育ててくれた今生の両親に無駄に心配を掛けたりする訳にもいかないと思つたのだ。

大きな樽に乘せられている蓋代わりの板をどけて、小さな桶に水を汲む、揺らぐ水面に映つた前世とは似ても似つかない翡翠の様な色の美しい瞳をなんとなく見つめた後、両手を使って顔を洗う、少し温いが贅沢は言えない。

この集落は畑で取れる野菜や森で取れる木の実そして狩で手に入れた肉を食べるという自給自足の生活をしていてほとんどの服も布から自分たちで作るという前世とは全く違う暮らし方だ。

前世の暮らしに比べると不便なことや苦勞も多いが、俺はこの生活を結構気に入っている、なんか自分か自分が日々生きているという実感があつてとても充実しているのだ。

「ふう、やっと頭が起きてきた、でも温水だとあんまり顔を洗つた気がしないなあ。魔法なんてものがあるんだし冷水や温水が出る、なんて魔法の道具、探したらありそうだな。発展している大きな

街ってどんな感じなんだろう」

俺は生まれてからまだ一度も集落の外に出たことはなくて、この世界の街での生活水準がどの程度の物なのかは知らない。

外の事は気にはなるものの、俺はこの集落での暮らしを気に入っているし何よりここには今生の家族もいる、いつか成長してから観光ぐらいは行ってみたいと思うが、物語のような冒険をしたいとは思えなかった。

悲しいことに今となっては過去形になってしまったが俺も男だったし、少しはそういう物語に出てくるような冒険に対する憧れはある、だがこの世界はファンタジー小説に出てくるような世界で、まぎれもない現実だ。^{リアル}

実際にまだ目にしたことはないが、聞いたところ危険な魔獣どころかドラゴンすら実在するという話だ。

前世で謎の巨大な化け物に食われて死んだ身としてはそんな存在に現実遭遇したいとは思えない、痛い目になど遭いたくはないし今の人生では両親より先に死ぬなんて親不孝をしたくはないのだ。

と、いろいろと考えはしたが、そんな訳で現在俺は、平穏に生きながら、唐突な死のせいで前世に出来なかった分も、今生の両親には将来しっかりと親孝行をしたいと考えていた。

……でも、孫の顔を見たいとか言われたらどうしよう……。

顔を洗って目を覚ました俺は家の中に戻り、リビングに当たる部屋に入った。俺の住む家、というか集落の家は大抵小さくて部屋もリビング、物置、寝室、台所の4部屋ぐらいしかなくて必然的に家に入るとそこはリビングになる。

「セリア、おはよう、目が覚めたのならエレアを手伝ってやりなさい」

「おはよう、父さん。じゃあ母さんの手伝いしてくるね」

リビングに入った俺に声を掛けてきたのは若々しい見た目に反して渋い声がカッコイイ男、父親のネグティス・リア・クエルだ。

座ったまま俺に母さんの手伝いを言いつけて来たが別に父さんが怠けているわけではない四六時中手伝いを強要されるわけではなくてしっかりと遊ぶ時間も有るのだが、それほど人口の多くないこの集落では子供でも大事な労働力で、親の手伝いをしながら仕事を覚えるというのは大事なことなのだ。

台所に入ると母さんはサラダを盛り付けているところだった。不思議な旋律の鼻歌を歌いながら体を動かすたびに俺と同じ色の金髪がさらさらと揺れている。

とりあえず何を手伝えいいのか声を掛けようとしたが俺が口を開くより先に母さんはこちらに振り向いた、どうやら俺の足音で気づいていたようだ。

「おはよう母さん、手伝うけど何をすれば良い？」

「おはようセリアちゃん、じゃあ早速だけどね……」

「……ん？ 味付けを変えたのか、エレア」

「まあ！ 気がついてくれたのね、隠し味を少し変えてみたのだけれど、どうかしら？」

「エレアの愛情の籠った料理がおいしくないわけないだろう」

「うふふ、ネグったら何時も真顔でそんなことを言うんだから恥ずかしいわ！」

あの後俺が手伝い始めてすぐに料理は完成して、今はリビングで家族そろって精霊への祈り、前世でのいただきますの様なものを済ました後に食事をしているところだ。

俺は何時も道理の目の前で繰り広げられる甘ったるいやり取りを眺めつつ、モサモサと野菜を食べていた。仲が良いのは結構だが毎日の前で見せられ続けるのはきついな、と顔には出さずに心の中で思いながら野菜を咀嚼する、口の中に広がる苦味がこの甘い空間では心地よかった。

どうも転生してから野菜や果物がやたらおいしく感じてしょうがない、前世では肉のほうが好きだったし今も嫌いというわけではないのだが肉と野菜が並んでいれば野菜に手を伸ばしてしまうという有様だ。

両親も野菜や果物が肉よりも好きなように見えるし、これはエルフの味覚が原因なのかもしれないな。

そんなことを頭の中で考えて目の前の光景から逃避をしていると母さんといちゃついていた父さんが俺に声を掛けてきた。

「セリア、一昨日も言ったが今日は午後から弓の訓練をする、昼には家へ帰ってきなさい」

「ん、わかった」

「セリアちゃんも、もう弓の訓練をする齡なのね、弓は狩の道具にも身を守る武器にもなる大事なもののだから、がんばるのよ、セリアちゃん。でも怪我はしないようにね」

「はい」

「エレア、幾らなんでも、最初から難しい事はさせないさ、初めは弓についての勉強でそれから徐々に子供用の弓を使って弦の張り方や構え方なんかを教えていくんだ。今日は怪我をするような事はしない」

「それぐらいわかっているわ、でも弦を張ったり矢を撃ったりする

練習を始めたら怪我をしちゃうかもしれないじゃない」

「まったく、お前は心配性だな、大丈夫だ。それに、たとえ多少の怪我をしても魔法ですぐに治せるし、エレアの腕なら後も残らないだろう？ ……思い出すな、初めてお前と出会った時、大怪我を負って動けないでいた俺の傷を綺麗に治してくれたのを、あの時のエレアはまるで女神のようだった」

「女神だなんて、うふふ、ネグったら！」

「エレア……！」

「ネグ……！」

俺は父さんと母さんの言葉に返事をした後、またいちゃつき始めてしまった二人から精神的な被害を受ける前に目を逸らし、一昨日父さんに言われたことを思い出していた。

なんでもエルフの子供は五歳ぐらいからそれぞれの親が弓の扱い方を少しずつ教え始めるんだそう。弓は狩に使うって日々の糧を得たり、集落や畑を魔獣から守ったりするための大事な道具でこの集落だけではなく、何らかの事情がない限り大抵のエルフは腕に個人差があっても大人はみんな使えるらしい。

元々はただの狩の道具だったのが、大昔のエルフの英雄が使っていた武器が弓で、それにあやかっただけで祭事に使うようになり少しずつそれが種族全体に浸透していき、今ではエルフが好んで使う特別な物になったとも言っていた。

前世を含めていままで弓に触れたことは一度もないがエルフの使う弓なんてファンタジーっぽいものに若干テンションが上がりつつも、

何時かは俺も集落の大人達のようにうまく扱えるようになれるのだろうか、などと考えながら朝食を終わらせた。

食事を終わらせた後、父さんはすぐ集落の皆で管理をしている畑の見回りに出かけた。

畑は魔獣や野生の動物が寄ってきて集落に被害を与えないようにある程度離れた場所に作られており、畑を守るために交代制で三人一組になり常に畑を見回るようにしている。

父さんは今日は朝から昼までの当番で昼に帰ってきた後昼食を家族で食べてから弓の扱い方を教えてくれる予定になっている。

「それじゃ、いってきまーす」

「怪我をしないようにねー」

「わかってるー」

扉代わりの綺麗な刺繍の施された布を押しつけて出かけようとしたところで、後ろからかけられた心配性な母親の声に俺はそう返しながら家から出た。

少し歩いたところで立ち止まり、太い枝と葉っぱの間に見える青空を仰ぎ見た。

「うん、今日もいい天気だ」

前世の地球ではまずお目にかかれなようなさまざまな植物や、30メートルを超える生命力にあふれた巨木が立ち並ぶ見渡す限りの広大で深い森。

その奥地には、巨木と一体化するような作りの木造の家屋に住み、自給自足の生活を営む人口200人程のエルフが住む集落、フィアティアが存在する。

その集落の中を、鳥のさえずりが響く木々の中、大きな枝の間から差し込む暖かな木漏れ日を全身に浴びながら俺は前世に比べると、何とも頼りなく見える細く小さな白い足でテクテクと歩き集落の中央にある一際大きな大樹を目指していた。

家々が一体化している巨大な木々の間を吊り橋の簡素な通路が複雑に繋いでいて、初めの頃はよく迷ったり通路のある高さに足が竦んだりもしたが、最近では馴れたもので目的地に向かって迷うことなく進むことができるようになってきた。

目的地に向かう途中、すれ違う集落の住人に挨拶をしたり時々一緒に遊ぶ同年代の子供と話したりしながら所々高さの違う場所に作ら

れた足場に梯子やロープを使ってすると移動してまた歩く。普通の人間の子供には危険な場所だが、どうやらエルフは人とは種族が違うだけに筋繊維の出来なども違うようで、スレンダーで色白という儂げな見た目とは裏腹にその身体能力は驚くほどに高い、だからこそこんな高い場所にも子供と一緒に平気で住んでいられるのだろう。

そしてしばらく移動してから足場に備え付けられているロープを使って地面に降りた俺はようやく目的地にたどり着いた、集落の中心地、そこだけ他に木が生えておらず森の中にぽっかりと大きく開いた広場に聳え立つ、フィリスという名の大樹だ。

他の木々も地球のものと比べるとありえない大きさを誇っているがこの木は更に大きくその高さは100メートル近くあるのではないだろうか、見上げるだけで首が痛くなるような高さだった。

「……んー、まだ来てないみたいだな」

どうやら待ち合わせをしていた二人より先に着いてしまったようだ。俺がポツリと思わず零した独り言の通り、周りを見渡しても目的の人影は無く俺とは違う年代の子供が遊んでいるだけだった。

ただボケッと突っ立っているのも何なので俺は大樹の根元に向かって、広場一面に生い茂っている足首ほどの高さの背の低い草を、サクサクと小気味良い音を立てながら歩き出した。

「よっほっと」

たどり着いた大樹の根元で軽く掛け声を上げながら巨大な根をよじ登り、ようやくその大きな幹に触れるほどに近づいた俺は幹に背中を預けてその場に座り込んだ。

「あーきもちいい……」

背中から伝わってくる大樹のひんやりとした何ともいえない冷たさがこの場所に来るまでに通った、まるでアスレチックのような道で軽く火照った身体に心地良くて思わず気の抜けた声を上げてしまった。そしてそのまま緩やかな風に頬を撫でられながら俺は目をゆっくりと瞑った。二人とも遅いなあ、と考えながら。

「セリア、セーリーアー、おい、セリア！ ……ダメだ、こいつ完全になんて寝てやがる」

大樹の根元、待ち合わせした人物を待っている間につい寝入ってしまったセリアの前には、呆れた顔をしている銀髪のエルフの少年が

立っていた。

少年の名前はアラベル・エナ・ベル、親しい者にはアベルと呼ばれている元気な少年だ。

「イストもまだ来てないし、セリアは寝ている……暇だー。にしても、全然起きないな、こいつ」

アラベルは散々声をかけても起きないセリアの顔をじっと見ていたが、何かを考えるように一旦、目を瞑ったあと、その綺麗な碧眼をパツと見開き、ニヤニヤとあまりよろしくない類の笑みをその顔に浮かべた。

「起きないのなら仕方がない。そう、これは仕方がないんだ、起きないお前が悪い！ と、言う訳で」

そう言うところアラベルは徐にセリアの前にしゃがみこむとその頬に両手を伸ばした。

「おお、こいつの頬すっげー伸びる！ ひどい顔してるな、はははっ！」

アラベルは実に楽しげにセリアの両頬をがっしりと両手で掴むと左右に引っ張り始めた。

左右に伸ばされたセリアの顔は睡眠時の力が入っていない表情と相

俟って乙女にあるま
ている。

じき実に残念な顔を晒してしまっ

しかしながらその行為に夢中になっていた少年は背後から迫る脅威にまったく気がついてはいなかった。

「あんたは、女の子の顔に、何をしているのかしら？」

アラベルがそんな言葉と共に自分の両耳に何かが触れるのを感じた時にはすでに遅かった。彼の両耳をむんずと掴んだ何者かはまさに今彼がセリアにしている行為と同じように左右に引っ張り始めたのだ。

「ぬぁー、痛い！ その声はイストだなぁ、耳を引っ張るなちぎれるぅー！」

「先にセリアを離しなさいっ！」

「それは出来んっ、精霊が俺にもっとやれと囁いているんだ！」

「そんなことを言う精霊なんているわけが無いでしょう！ あんまりしつこいと干切るわよ！」

「ぎゃあ！ やめろー！」

両耳から襲い来る痛みに涙目になりながらも若干おかしなテンションでセリアの頬をむにゅと引っ張り続けているアベル。

そしてそんなアベルの両耳をぎりぎり引っ張ってやめさせようと

している少女の名前はイストニス・テア・イエル、周りからはイストと呼ばれている真面目で少しばかり頭の固い女の子である。二人が喧しく騒ぐ目の前で頬を伸ばされながら魔されている少女がこの場所で待ち合わせていた幼馴染達だった。

「う、うーん……ふぁ？」

「あ」

いつの間にか寝てしまっていた様で、騒がしさと痛みを感じて俺が目覚めると目の前にいたエルフの少年、アベルと目が合った。こちらを見てなにやら引きつった顔をするアベルと見詰め合ったままの奇妙な沈黙が痛かった。というか、物理的に痛い、頬が、すごく痛い！

アベルが俺の頬を掴み俺が起きたことにまだ気が付いていないイストがアベルの耳を掴んでいる光景を見て、とりあえず状況を認識した俺はこの状況を生み出したであろう元凶に向かって両腕を素早く伸ばした。

「……ふん！」

「ぬががっ!？」

「あ、おはよう、セリア」

「ん、おはよう、イスト」

俺が両手でアベルの両頬を左右に引っ張って仕返しをしていると、アベルの呻き声に気が付いたイストが起きた俺を見て、アベルの耳を今まで以上に力強く引っ張りながら挨拶をしてきた、俺はイストの与える痛みに気を取られたアベルの両手から逃れ、両手にこめる力を強めつつ挨拶を返した。

「ごめん、待っている間にいつの間にか寝ていた」

「気にしないで、私もさっき来た所だから」

「おまふえら、ひひかへん、はなへえー！」

にこやかに俺と会話をするイストと涙目で叫ぶアベル。二人は俺の幼馴染で、親同士が中の良い友人なのもあり赤ん坊の頃からよく母親三人が集まって一緒に俺達の面倒を見ていたのだ。

そんな訳で物心付いたときから一緒に遊んでいた二人とは仲がよくて、他の子供と遊んだりする時でも大抵三人揃っている。

三人で一緒にいると前世の幼馴染、まーちゃんとそー君を思い出し

て時々不安になることがある。今はこうして平穏な生活を送っているが、いつか、前世のときのように突然それが終わってしまうのではないか、という考えが頭に浮かんでしまうのだ。

恐らくこんなことを考えてしまうのは、前世での体験が少しトラウマの様になっているのだろう。

「セリア、どうかしたの？ 眉間に皺が寄っているわよ」

「いや、何でアベルはやり返されるのが分かっているのに何時もこんなことをするのかなんて考えてた」

「しかたがないわ、だってアベルだし」

「ああ……そっか……」

「うおい！ アベルだして何だよ！ 俺が馬鹿みたいな言い方はやめろよな！」

どうやら考え事をしていたのが顔に出ていたらしく、イストが心配して声をかけてくれた。

純粹に心配してくれるのは嬉しかったものの正直に言う訳にも行かないので、言い訳のために咄嗟に考えた話題を出して誤魔化したのだが、イストが返してきた妙に説得力のある答えに俺は思わず納得してしまった。

そして、俺たちに文句を言いつつ、ようやく俺とイストの拘束から抜け出したアベルをなんとなく二人でじっと見つめた。

「……何で二人して可哀想なものを見る様な目で俺を見ているんだよ、おいやめろよ、何で無言なんだ、おい。……そんな目で見るな、心が……抉られる……！」

どさり、と胸を押さえて膝から崩れ落ちたアベルに俺は視線を向けたままこう思った。

ああ、今日も平和だな、と。

ロージュ暦629年、初夏。
集落は平和だった。

第一話（後書き）

お久しぶりです。……本当にお久しぶりです。

自分の事ながら前回の投稿からまさか

こんなにも時間がかかるとは思っていませんでした。

なかなか書きたいことをうまく文章に出来ずに

毎日少しずつ書き続けてようやく二話目が完成いたしました。

文章量とクオリティを維持しなければならないプロの小説家をやっている方々は

本当に凄いのだと改めて思いました。

こんな遅筆な作者ですが、良ければこれからも見守っていただけたらと

とても嬉しいです。

小説に対してのご感想、ご指摘などを書いていただけると、とても助かります。

それでは、読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8859u/>

弟子と師匠と永い旅路

2011年8月24日20時44分発行